

<随想>音楽とことば

著者	佐川 誠義
雑誌名	日本文学誌要
巻	39
ページ	88-89
発行年	1988-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019558

音楽とことば

近年日本人で国際的に活躍する音楽家が増加の一途をたどっている。それも単に量的にそうなのではなく、質的にも一流とみなされているひとが少なくなってきた。いまさら小沢征爾を挙げるまでもなく、ピアニストの内田光子や室内楽の東京クワルテットが胸のすくような活躍ぶりを見せていて、日本人もやるものなどと嬉しくなり、自分のなかにある愛国心をいまさらのように自覚させられている。しかし、クラシック音楽のなかには、どうしても日本人が（少なくとも一流としては）進出できないジャンルがある。

それは声楽、とくにオペラである。私は日本人のうたうオペラをきいて真に感心したことがない。日本人としてはよくやると思ったことはあるが、こう考えること自体、その歌手にとって失礼なことであろう。念のためにつけくわえておくが、彼らの声に問題があるのではない。声がたっぷりしていて、音程にもなんら不安なところがないにもかかわらず、私の胸をまったく打たないのである。

かの偉大なドイツのソプラノ、シュヴァルツコプフがこの点に関して興味ぶかい発言をしたのを聞いたことがある。彼女によれば、日本の音楽家の最大の弱点はことばにあるという。声もいい、テクニクにもどこといって欠陥が見つからないのに、感情がほとんど感じられないことが多いということだった。すなわち、ことばがそ

の意味を失い、ほんのうわつつらで発音されるのだという。

これには私も完全に同感である。西欧の歌曲のことばは、日本人にとっては外国語である。だからそういうことが起こるのだ、と言う人が出てくることだろう。しかし、問題は単にそこにあるのではない。

あまり好ましいことではないが、歌っている内容を理解してもらおうという配慮からか、オペラが日本語で上演されることがある。このばあい、日本人の歌手にはことばのハンディはない。にもかかわらず、ことばが意味をうしない、単に旋律をささえる道具としてしか機能しない場合がおおい。もっとひどくなると、日本語でうたわれているのに、ほとんど聞き取れないことすらある。歌手の名前を挙げるのはよすが、かなり日本では有名なひとですら、この欠点から自由ではない。言葉を大切にするという点では、何人かの歌謡曲の歌手のほうが数段うえである。

従って、問題は、日本語と外国語といった面にあるのではなく、日本人と西欧の音楽のことばにかんする問題と考えるべきであろう。日本人は少なくとも音楽に現れることばには鈍感である。

先日マリア・カラスの実に興味ぶかいCDが手に入った。ジュリアード音楽院での公開レッスンを三枚のCDにおさめたものであ

佐川 誠 義

る。最初から最後までききとおすと正味3時間半かかるという大変なものである。私はそれほど期待しないで聞き始めた。というのは、トスカニーニやベームのリハーサルをそれまで聴いたことがあったが、それほど面白いとは思わなかったからである。しかしカラスのこのCDのもつ迫力はおよそ私の想像を絶するものだった。

録音は一九七一年と七二年に行われている。この頃はカラスの声は駄目になっていて、舞台ではとくに歌わなくなっていた。だから、素晴らしい声がきけるとは思っていないかったし、実際この予測はほぼ当たっていたのだが、にもかかわらず聞き手を捉えるじつに本質的なもの（それをうまく言い表せないが）を彼女の声の中にききとることができた。勿論これは彼女のリサイタルではないし、生徒に教えるというかたちをとっているが、やはり主役はカラスその人なのである。

このレッスンでカラスのいいたいことを、要約すれば、歌におけることが如何に大事であるかということに尽きる。期せずして、今世紀のもうひとりの大ソプラノの発言と完全におなじものになっている訳である。

レッスンは英語で行われているが、歌詞はイタリア語、フランス語、ドイツ語の三ヶ国語にわたっている。生徒の能力は様々だが、さすがカラスの指導を受けるのに相応しいと感じさせる優等生たちであることは間違いない。

どの曲でもカラスは生徒と一緒に歌う。生徒は若い。声がぐんぐん無理なくまえにでる。とうぜんこの時期のカラスの声とは、物理的には比較にならない。それなら、生徒のほうがよく歌の内容客を伝

えているかというところ、それは全く逆である。生徒はひとりひとりの差はあっても概してことばの読みが表面的である。カラスは苛立つ。数小節うたうごとに「いま何といっているの？」ときく。生徒の方はしどろもどろである。そんな質問は予想しなかったのに違いない。とくに「リゴレット」のアリアのレッスンを受けたバリトン・ミオ・ベネという表現が現れるのだが（私の大事なものといった意味）、カラスにそれは何かとつめよられ、「恋人」だと答えてしまう。実はリゴレットの娘のことで、カラスの激しい非難を浴びることになる。

全体がこういう調子ですすんでいく。最後に日本人の生徒があらわれ、「蝶々夫人」のアリアのレッスンを受ける。カラスと生徒が交互に歌うのだが、そのちがいのあまりの大きさにびっくりしてしまう。勿論、その前の生徒にも同様の傾向はみられた。しかし、カラスによってかなりの程度まで改善されたし、ほとんど彼女と同じ表現力を得たものも数人いた。ところが、この日本人の場合は絶望的であった。つましくリリカルないい声である。しかし表情がない。カラスがどういおうと一向に変わらない。途中から、カラスのことばに微妙な変化があらわれる。すなわち、全く改善されないのに注意しなくなるのである。ああ投げてしまったのだな、と私は思った。これはおそろしく残念なことだ。優秀だとおだてられている日本人の音楽家のこれは重大なウィーク・ポイントである。ことばを専門とする私にとってこれは興味ぶかい問題だが、どうしてそうなのか、今のところ五里霧中である。

△文学部教授▽